



住み続けたいかをテーマに子どもたちが話し合った。準備から当日の進行まで子どもたちが一生懸命取り組んだ。また、子どもたちは事前に第8次多治見市総合計画の勉強をしたため、会議当日はグループ別話し合いになるとすぐに多くの意見が出され、おとなはとても感心していた。

・おとなは手を出してしまいがちだが、子どもに任せることが大事だと感じた。多治見市の子どもたちは期待に応えてくれると思うため、そういう子どもがもっと増えるような第4次推進計画を来年度策定していきたいと考えている。

## ○ 各委員の自己紹介

・会長あいさつ

今日也多治見市の子どもたちのために、委員のみなさまにはいろいろなご意見をいただきたいと思う。よろしくお願ひしたい。

## 【議題】

### 1. 子どもの権利に関するアンケート調査中間報告について

事務局 (説明…資料 1-①、1-②、1-③)

会長 事務局の説明について、ご質問、ご意見があればお願ひしたい。

委員 今回は初めてインターネットと郵送で回答が寄せられたが、インターネット回答、郵送回答の内訳はどのような結果であったか教えてほしい。

事務局 回答方法の内訳については、回答数がすぐにお答えできないが、郵送回答の方が多い結果となった。郵送回答が多かった理由としては、今回のアンケートは設問数が多かったり、また例えば「ある」と回答した場合にのみ回答する設問があったりと、設問構成が複雑であったためではないかと考える。しかし、インターネットで回答した子ども、おとなもいたため、インターネット回答を行った成果はあった。今後もインターネットを活用したアンケート調査を続けていきたいと考えている。

委員 今回のアンケート調査結果は大変興味深い結果となったと思う。保育は、いかに子どもに“正”の自己感を強化して、“負”の自己感に陥らないように配慮することだと考えている。おとなが子どもを愛おしいと思い、その都度子どもの思いを受け止め、尊重するという営みが大切であり、それによって子どもはおとなを信頼し、自己肯定感の源となると思う。毎日の暮らしの中では、子どもを制止したり叱ったりすることは必ずあるが、子どもの思いとおとなの願ひが逆になってくるために起きることであり、家庭の中での子育ての難しい場面だと思う。しかし、信頼関係ができていれば、子どもはおとなからの圧力だと思うことなく、大好きなおとなが言うことだから聞こうと思うことが大切であり、そのことが今回のアンケート調査結果にも出ていると思う。おとなの子どもを受け止める対応が、子どもの「受け止めてもらった」という思いにつながっていることがとても大事である。

会長 自己肯定感別の分析について、ほかにご意見があればお願ひしたい。

委員 中学校でもやはり自己肯定感は低い。例えば「自分によいところはあるか」と質問すると「ある」と回答する子どもはとても少ない。しかし、「友だちのよいところは分かるか」とたずねると、「わかる」という回答が多くなる。つまり、他人の

よいところは分かるが、自分自身のことは理解していないということである。市内の中学校全体でも教育計画において、いかに自己肯定感を上げていくかが課題となっており、今回のアンケート調査で分かった「年齢が上がるにつれて自己肯定感が低くなる」という結果を聞いて納得できた。先日ある方から「先生が子どもの話を最後までしっかり聞いてくれたことを子どもがとても喜んでいた」という話を聞き、「認め励ます」ことがとても大事であると感じた。おとなは自分の思い、考えや価値観によって、どうしても子どもの話を最後まで聞かず、途中で割って入ってしまうことがある。この話を聞いて、とにかく子どもの話を最後まで聞くこと、共感できる部分は共感すること、共感するなかで助言したりアドバイスしたりすることが大事であると先生たちに話した。自己肯定感及び自己有用感、自分のよいところだけではなく、苦手な部分も受け入れて、自分自身を理解することを大切にしていかなければならない。

- 会 長 多治見市の中学校では自己肯定感が低い傾向がみられるのか。
- 委 員 全体的に低い傾向はみられる。自己肯定感が低いため、多治見市教育基本計画でも「挑む」という部分が課題となっている。挑戦することに消極的である傾向があるのだが、自分に自信がないために挑戦することができないことと関係があるのではないだろうか。
- 会 長 ほかに何かご意見があればお願いしたい。年齢が上がっていくと自己肯定感が低くなる率を少しでも低くしていければ良いと考えて様々な取り組みを行い、その結果として令和元年度調査に比べて自分のことを「好き」と回答する子どもが多くなった成果につながったことは、確実に前進していると思う。しかし、この結果に満足せず、さらに子どもの自己肯定感を上げるためにはどうしたらよいかを今回議論する必要がある。
- 委 員 自己肯定感の向上は学校全体で取り組んでいる。学校では、子どもが自分たちで考えて判断して行動し、子どもの自信につなげる生徒会の活動に力を入れている。例えば、「『靴と靴下が白色と白色』はどう思うか」という議題を生徒会で議論すると、「制服はフォーマルだから、黒色や紺色がよいのではないか」「靴も別に白色じゃなくてもよい」等の意見が出てくる。子どもたちの中で「ここまでにしよう」「この時はこうしよう」というように自分たちで約束を決めて、校則を変えていこうという動きとなることが大事である。これまでは学校や先生が決めてやってきたが、子どもたちの中で問題提起して議論し、先生の意見も取り入れながら変えていく動きに変わることにより、「自分たちでやった」「自分たちで変えた」「真剣に考えた」と思うことができる。実際に、私の学校では靴下も靴も自由であり、冬の防寒着も自由であり、子どもたちが自分たちなりに考えて行っている。今年の夏は暑かったが、「ネッククーラーや手持ち扇風機を使用してもよいか」という議論になり、生徒会が中心となって自分たちで約束ごとを作ってきたため、提案された案を確認したうえで使用を許可した。ある程度線引きをする必要はあるが、子どもたちの活動をこれからも大切にしていきたいと考えている。
- 会 長 やはり子どもたちが「自分たちのことは自分たちで決めたい」という求めている権利を大切にしていける必要はある。自分たちで決め、手ごたえ感があれば、自分のことを肯定的に見ることができる。

委員 先日中学校で教育実習を行った時も、ちょうど防寒着についての議論が出ていた。制服の上に防寒着を着てもいいということになったが、フード付きは危ないから禁止するのではなく、引っ張られたり引っかかったりしないように注意して着るようという話が先生からあった。リスクに配慮してくればよいという姿勢がとてもよいと思った。以前に書籍で読んだが、中学校、高校になると校則が多くなり、厳しい内容が増える。最近「ブラック校則」という言葉も聞いたりするが、日本の学校のルールは「〇〇〇してはいけない」が多く、子どもたちは自分の生きる幅がどんどん狭くなるように感じると思う。例えば、靴下の色であれば、何色かある中から選択できるといった肯定的な言い方にすると、子どもたちも広がっていく視点で考えることができるのではないかと。ルールについても、まわりのおとなが子どもに与えて、子どもは関与できないのではなく、子ども自身が選択しながらルールを決めていけたらよいと考える。

委員 自己肯定感はいろいろな作用をしていることが分かった。自己有用感、自己決定感、自尊感情などいろいろなものが作用して、自己肯定感が高まることにつながる。養正地域会議で、中学生が自分たちで企画して、地域の皆さんとゲームをやるという公民館まつりがあった、おとなが何か提案することはなく、中学生がやりたいことを考えながら進めていく様子を見ると、本当にみんなが力を合わせて生き生きと活動していた。子どもが自分で決めて実行していくエネルギーをおとなが大切にしていける必要があると感じた。

会長 キーワードとしては「自分で決める」「自分の願望や思いを実現する」ということになってくる。ほかにご意見があればお願いしたい。

委員 「子どもの権利の中で、特に大切だと思うことは何ですか」という設問について、子どもとおとなの1位と5位が全く逆になっている結果はとても興味深い。子どもはやはり「自分のことは自分で決めたい」という自己決定を大切だと思っているが、おとなはそれほど重要視していないことがわかる。私たちおとなは子どものことを認めていないとか、任せられないと考えているのかもしれない。第4次推進計画を策定する時には、おとなの子どもに対する姿勢を強調してほしい。また、子どもの話を最後まで聞く、子どもが意見表明できる場を作っていく、子どもの意見を聞く機会を設けることが大切だと思う。

会長 子どもの話を「聞き切る」ということである。おとなはどうしても途中で口を挟んでしまい、子どもの話をさえぎってしまうことがある。子どもの権利で大切だと思うことについては、おとなで「自分の考えをいつでも自由に言えること」が2位になっているが、「自分のことは自分で決めたい」が5位であるという結果に思うところがある。大学1年生は、大学生活4年間の学びをどう積み上げていくかを考える初年次演習という授業がある。その授業の中で「どうしてこの大学を選んだのか」と聞くと、「親にすすめられて」「親に決められて」と答える学生が少なからずいる。また、教員採用試験に合格しなかった場合に、次の進路を考える必要があるが、「親に相談して決める」と言う学生もいる。オープンキャンパスを開催した時には、多くの親も本人と一緒に来るが、大学側も気づくと親にばかり話をしていするため、本人の意見を聞くように気をつけている。

今回のアンケート調査では、子どもの自己肯定感が上がっていること、子どもの

権利条例の認知度が上がっていることといった結果を評価として示すことができるとよい。しかし、第4次推進計画に向けて、学校での授業等の成果によって子どもの権利条例の認知度が上がったとはいえ、まだ約半数の人が条例を知らないため、引き続き子どもの権利の啓発を進めていく必要があると考える。

## 2. 第4次子どもの権利に関する推進計画の策定にむけて

事務局（説明…資料2-①・2-②）

会長 事務局の説明について、ご質問、ご意見があればお願いしたい。

委員 子どもの権利に関する推進計画ができた時からずっと関わってきているが、「自己中心的」ではなく、子どもの「自己肯定感」という言葉が定着してきていると感じる。自分の苦手な部分も含めて、自分のよさとしてみんなが認めることが自己肯定感につながる意識も浸透してきている。人権週間の期間には、小学校でもLGBTQの講演会が開催され、子どもたちはそういった機会を大事にして、自分なりに受け取め、違いを認める大切さを理解している。発達段階に応じた施策を打ち出すと、子どもたちも人権について考えることができると思う。アンケート調査結果にも出ていたように、子どもは自分のことは自分で決めたいと思うし、保護者は子どもの安全を重要だと考えていることが分かった。

会長 先ほどのアンケート調査結果で、不登校についても「いろいろな理由があるから仕方ない」「本人の意思だからいい」という回答が多くなり、多様な生き方を認める考え方が浸透していると思われる。

委員 先日開催されたたじみ子ども会議で子どもたちからいろいろな意見が出されたというお話があり、今後子どもたちの意見がフィードバックされると思う。子どもの自己決定の観点からいえば、第4次子どもの権利推進計画の策定にもできるだけ多くの子どもたちの意見を反映し、子どもたちが「自己決定した」と思えるような手順や方法を入れるとよいと考える。たじみ子ども会議での意見聴取等も予定されると思うが、子どもたち自身が参画していることを多く実感できる仕組みで第4次推進計画を策定していただきたい。

会長 「自分のことを好き」と思える子どもを80%以上にしていくために、初等教育は大切だと考えている。多治見市や東濃地区のよさを生かしていくためには、幼稚園・保育園から小学校へのつながりが大事ではないかと思う。幼児教育において自分で考えた遊びを思う存分やってきた子どもが、小学校での教科学習の中でも、自分で決めることができるような場面、自分の願いや思いを実現できるような場面を初等教育のスタートで意識できれば、自己肯定感の向上への効果も期待できるのではないか。

## 3. その他

### ①令和5年度第3回委員会について

日時：令和6年2月28日（水）10:00～12:00

会場：多治見市役所本庁舎 2階大会議室

②【案内】上野千鶴子さん講演会「地方で女性が生きる道～自分らしく生きるためには～」

日 時：令和6年1月18日(木) 13:30～15:00

会 場：多治見市産業文化センター 5階大ホール

主 催：岐阜県・多治見市

③その他

- ・多治見市子どもの権利に関する条例制定20年  
フェイスタオル・フリクションスタンプの説明

会 長 先ほどの生徒会活動のお話で思い出したが、以前の子どもの権利委員会で中学生が21:00以降のスマートフォンの使用が禁止されているというお話があった。刈谷市では「生徒会サミット」という取り組みがあり、各学校が一つの会場に集まり、その様子をオンラインで全校生徒が見るという行事を開催している。各学校が生徒会活動で盛り上がりつつつながっている様子を、中学校1年生・2年生や小学校6年生の子どもたちが見ることは、私たちが目指している子どもの自己肯定感の向上への近道となる方法のひとつになるのではないかと考えて紹介させていただく。  
今回もいろいろなお意見をいただきありがとうございました。

(閉会)